

ソーシャルワーク実践モデル相互の関係性の検討 —実践モデルの混成活用を成立させる メタモデルの追究を通じて—

田嶋 英行*

わが国におけるソーシャルワーク実践においては、これまで、さまざまな「モデル」や「アプローチ」、「パースペクティブ」が紹介され、さらにはそれらについてさまざまな議論が繰り返されてきた。そのなかでも「モデル」は、ソーシャルワーク実践において、クライアントが抱えている生活課題を特定するための「ファインダー装置」であり、そしてそれこそが次の展開を可能にしていく、まさに「生命線」とでもいい得るものである。その代表的なものとしては、「治療モデル」、「生活モデル」、「ストレングスモデル」の3者を挙げることができるが、わが国においてはとりわけ「生活モデル」を基盤にしながらか他の2つのモデルを「混成活用」していくジェネラリスト・ソーシャルワークを展開することが求められている。しかしその「混成活用」を可能にするメタモデルについては、これまで十分に明らかにされてきたとは言い難い。本稿はそのメタモデルについて、とりわけそれら3つのモデルが立脚している存在者的（ontisch）な次元、および存在者を存在者としてあらしめる存在（Sein）について問う存在論的（ontologisch）な次元の両者をもとに考察をおこなうものである。そしてその際には、現存在（すなわち人間）について存在論的な分析をおこなった Martin Heidegger による実存論的分析論をもとに、その作業をおこなっていく。

Key Words : 実存論的分析論, 存在論的差異, 治療モデル, 生活モデル, ストレングスモデル

I . はじめに

わが国におけるソーシャルワーク実践においてはこれまで、「治療モデル」や「生活モデル」、

* 人間学部人間福祉学科

「ストレングスモデル」, 「心理社会的アプローチ」や「問題解決アプローチ」, さらには「エコシステムパースペクティブ」など, さまざまな「モデル」や「アプローチ」, 「パースペクティブ」が紹介され, かつそれらについてさまざまな議論が繰り広げられてきた. そもそもソーシャルワーク実践は, 対象となるクライアントが抱えている生活課題を解決するために展開されるわけであり, その際に必要になってくるのが「道具立て」（社会福祉士養成講座編集委員会 2010b : 123）すなわち「個別・具体・特殊な対象に実践を展開するための方法や技術」（同前）である. この「道具立て」の具体的な内容がこれらの多様な「モデル」や「アプローチ」そして「パースペクティブ」であり, そしてそれらの集成こそがソーシャルワーク実践理論（social work practice theory）である（前掲：123 - 124）.

これらの「モデル」や「アプローチ」さらに「パースペクティブ」といった用語は, 「それぞれの使用者がそれぞれの目的や意図で, 厳密に区別して意味づけしたり, そうでなかったりしている」（前掲：128）のが現状ではあるものの¹, ソーシャルワーク実践についての標準的なテキスト（社会福祉士養成講座編集委員会 2010b）によれば, それぞれ以下のように定義されることになる. まず「モデル」とは「直接には把握することが難しい事象や現象を抽象化して, 時には図式化等を試みて, 描写, 記述しているものと解することができる」（前掲：129）もののことであり, つぎに「アプローチ」とは「仕事や研究, 問題などに『とりかかる方法』（時にはその際の態度も含む）であり, 一連の流れをもった具体的な方法」（同前）のことであり, さらに「パースペクティブ」とは, 「『物の見方や考え方』『見解』『見通し』『見込み』」（同前）のことであり, ソーシャルワーク実践においてはまず, 先の「モデル」によってクライアントが抱えている「直接には把握することが難しい」生活課題を捉えていくことになるのであり, そのうえで「一連の流れをもった具体的な方法」である「アプローチ」によってそれ自体を解決していく, ということになる. つまりソーシャルワーク実践において「モデル」とはすなわち, クライアントが抱えている生活課題を特定するための「ファインダー装置」（同前）であり, そしてそれこそが「次の展開を考え, 前進することができるようになる」（同前）ことを可能にしていく, まさに「生命線」とでもいい得るものなのである.

先の標準的なテキストにおいてはソーシャルワーク実践における代表的な「モデル」として, 「治療モデル」, 「生活モデル」, そして「ストレングスモデル」の3つを挙げている（前掲：131 - 135）. それらにおいてはまず「治療モデル」から順に提唱されていったのであり, 後のものになるにつれ「それまでのモデルの問題点を指摘し, それを凌駕するべく, 新しいモデルの特徴, その意義を強調」（前掲：131）していつている. そして「現在, それぞれのモデルはそれぞれがもっている強みと弱みをもち合わせながら, 共存している」（同前）. つまりこれら3つの「モデル」というのは, 必ずしも「前出の実践モデルを, この後の実践モデルが完全否定し得たこと, 完全に乗り越えた」（前掲：136）ことを意味するわけではないのであり, 実際にはこれら3つの「強みを摂取しながら, それぞれの実践モデルが架橋して, 複雑多様で, 個々別々な動態としての生活をとらえ, 課題を認識」（前掲：137）していく必要がある. それゆえ

このテキストにおいては『生活モデル』を中核的实践モデルとし、『治療モデル』『ストレングスモデル』それぞれの強みを摂取（同前）したジェネラリスト・ソーシャルワークの有意義性とその具体的な展開のあり方について論じている（前掲：136 - 141）。つまり今日のソーシャルワーク実践においてはこれら3つのモデル、とりわけ「人と環境の交互作用、その関係性に焦点をあてる生活モデルを基盤にしながら」（前掲：137）、他の2つのモデルを「その時々の実践状況に応じ、縦横無尽に混成活用する」（同前）ジェネラリスト・ソーシャルワークを展開していくことが求められていると考えられるのである。

ただしここでこれら3つのモデル、すなわち「治療モデル」、「生活モデル」、「ストレングスモデル」の混成活用を考えた場合、先のテキストが指摘しているのであるが、「それを成立させるメタモデルとは何かといった理論的課題」（同前）が浮上してくることになる。先にも述べたようにこれら3つのモデルは「それまでのモデルの問題点を指摘し、それを凌駕するべく、新しいモデルの特徴、その意義を強調」した結果として形成されていったのであり、したがって当然のことながらそれらは互いに相反する性格を有している。それにもかかわらずジェネラリスト・ソーシャルワークにおいては、それらの混成活用をおこなっていく。つまりこの「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」は、理論的には相反する内容を含んでいながらも、その場面に応じて必要となるモデルを用いて対応しようとする御都合主義的性格を有していると捉えられかねないのである。しかしながらこのジェネラリスト・ソーシャルワークは、これからのわが国に必要となる「地域を基盤としたソーシャルワークや総合的かつ包括的な相談援助」（社会福祉士養成講座編集委員会 2010a：156）に「理論的基盤を提供するもの」（同前）として位置づけられており、かつソーシャルワーク実践における理論的中核を担うものとして期待されつつある。したがってそもそも「治療モデル」、「生活モデル」、「ストレングスモデル」という3つのモデルの混成活用を成立させるメタモデルとは何かを明らかにすることは、今後のわが国におけるソーシャルワーク実践において、必ずや解決していかなければならない喫緊の課題なのである。なお先のテキストにおいては、この課題自体が存在していることのみを指摘しているだけで、いかにそれを解決していったらよいかについては論じていない（社会福祉士養成講座編集委員会 2010b：137）。

本稿ではこの課題、すなわちこれからのわが国におけるソーシャルワーク実践の基盤を担うべきジェネラリスト・ソーシャルワーク、つまり「治療モデル」、「生活モデル」、そして「ストレングスモデル」の混成活用をおこなう援助枠組みを成立させるメタモデルについて、とりわけそれら3つのモデルが立脚している存在者的（ontisch）な次元、および存在者を存在者としてあらしめる存在（Sein）について問う存在論的（ontologisch）な次元の両者にもとづいて考察をおこなっていく。なぜならこれら存在者的小よび存在論的な次元での問いこそが、そのメタモデルを導き出すことを可能にするからである。なお具体的詳細については以下順に論じていくことになるが、その際にはとりわけ実存（Existenz）という、他の存在者にはみられない特殊な存在の仕方をしていゝる現存在（Dasein）としてのクライアントを存在論的に分析する

必要がある。したがって、現存在（すなわち人間）についての存在論的分析をおこなった Martin Heidegger による実存論的分析論 (Die existenziale Analytik) をもとに、その作業をおこなっていく。

II. 存在者的な次元の問いかけを遂行する 3 つのモデル

周知の通り Heidegger は、その前期の主著 (Heidegger=1994a,1994b;2003a,2003b,2003c) において「存在一般の意味」すなわち「もの」があることの意味を解明しようとした。そしてその際には、その意味を唯一問う存在者である人間の分析、つまり存在理解を有する現存在の存在論的分析を通じて明らかにしようとしたのであった。しかしその企て自体は、彼自身による前期の主著において途絶することになり、後期における思索へと受け継がれていくことになる。先にも述べたように本稿では、あくまで「治療モデル」、「生活モデル」、そして「ストレングスモデル」というソーシャルワーク実践における 3 つのモデルの混成活用を成立させるメタモデルについて考察するのであり、その際に Heidegger 自身が「存在一般の意味」を解明する過程でおこなった人間（現存在）についての存在論的分析である実存論的分析論の知見を活用していくことになる。

Heidegger はまず、「もの」そのもの（存在者）と「もの」があること（存在）を明確に区別する。そしてこのことを、存在論的差異 (ontologische Differenz) と表現している²。なぜなら「従来の存在論ではこの区別が曖昧であり、絶えず存在と存在者とが混同され、存在をまたある別の存在者（例えば神）に帰すといったことが繰り返さされてきた」（平田 2002：131）からであり、「あたかも存在が何らかの存在者でもありうるという性格をもっているかのように、存在者の由来をたどって他の存在者へと還元することによって、存在者を存在者として規定することをしない」（Heidegger=2003a：18）ようにするためである。

A. 実証科学を指向する「治療モデル」

まず「もの」としての存在者についてであるが、その全体をさまざまな区域に分けると、「例えば、歴史、自然、空間、生命、言語等々といった、一定の事象領域が成立してきて、この事象領域をそれぞれ主題的に探究すると、そこに種種の実証諸科学が成り立つ」（渡辺 1980：25）ことになる。つまり実証性を重視するいわゆる科学は、あくまでこの存在者の事象領域を「具体的に解明し、そこでの諸事象の知見を増大させる」（同前）存在者的な次元の問いかけを遂行するものなのである。先に挙げたソーシャルワーク実践における 3 つのモデル、すなわち「治療モデル」、「生活モデル」、そして「ストレングスモデル」のうち、始めの「治療モデル」については明らかに、この存在者の事象領域を遂行するものである。このモデルにおいてソーシャルワーカーは「クライアントが抱える問題を把握・認識するために、クライアントを問題の原因を有している対象としてとらえることに重点をおき、問題（結果）を引き起こしている

直接的な原因を特定しようとする」(社会福祉士養成講座編集委員会 2010b : 132)。つまりこのモデルは「客観的証拠(エビデンス)を重視し、客観性や科学性を担保しつつ、課題を認識しようとする特徴をもったモデル、範型であり、その特徴は実証主義に裏づけられている」(同前)のである。ここで、このモデルについての具体的な事例についてみてみよう。先の標準的なテキストは、以下のような事例を挙げている(前掲:122)。

中学1年生の直子さん(仮名)は、夏休み明けの2学期から、学校へ登校できない状況が3週間続いている。心配になった母親は担任教師に相談し、スクールソーシャルワーカーと話をすることを勧められた。

母親によれば、直さんは3カ月前より「学校に行きたくない」とこぼすようになり、午前中で早退したり、時々、登校しないことがあったという。また、授業時間や休み時間を問わず、「クラスのなかが騒がしくて落ち着かない」と訴えたり、「友達ができない」こと、また所属している部活動(吹奏楽部)では、「先輩が厳しく、自分だけ相手にされていない」といったことを気にしていたとのことであった。

母親は、このまま学校へ行けない状態が続くことを心配し、1日も早く登校するようになってほしいが、無理強いすることもできず、対応に苦慮している様子である。最近の直さんは、1日自室で過ごしていることが多く、夜間、熟睡できない日もあるらしい。

ソーシャルワーカーが「治療モデル」によって、この事例におけるクライアントが抱える課題を把握するのであれば、直さんと母親を「対象としてとらえ、どのような問題が起こっているか、また、その問題の原因は何かと、客観性をもった因果関係を探求して」(前掲:139)いくことになる。そして、以下のような「問い」が想起されることになるという(同前)。

1. 直さんが、登校できなくなった原因はどこにあるのか。
2. それは、学級のなかで「いじめ」のようなことがあったのではないか。
3. それとも、部活動の仲間との関係で何かあったのではないか。
4. 親の育て方、かかわり方に原因があったのではないか。
5. 生育歴のなかで、発達課題上の問題はなかったのか。
6. 精神疾患的な課題を抱えるに至っているのではないか。

ソーシャルワーカーは、クライアントである直さんとその母親を対象化することによって、直さんが学校に行くことができなくなった「原因」を探っていくことになる。つまりこのモデルは対象化されたクライアント、すなわち存在者の事象領域を「具体的に解明し、そこでの諸事象の知見を増大させる」存在者的な次元の問いかけを遂行する実証科学を指向するものといえるのである。

B. 「生活モデル」と生態学

それではつぎに、「生活モデル」はどうであろうか。これはひとえに、「生物と環境の間のバランスのとれた相互依存関係について追究する学問である生態学の特徴を、『人と環境』との関係において考究したもの」（前掲：133）であり、さらにそれにおいては「人と環境の交互作用」（同前）に焦点が当てられることになる。Gitterman と Germain によれば「生態学理論は、有機体（organism）と環境（environment）の相互依存を強調することから、われわれが人と環境（person - and - environment）という概念をもって歴史的に傾注してきたソーシャルワークの隠喩（metaphor）に、とりわけふさわしいものとなる。この生物学的隠喩は、人びとを援助し、かつ人間が成長し、健康を得、そして社会的に機能することによって満足することを支える応答的な環境の形成を促す、という社会的な目的を専門家が実践していくことを助ける」（Gitterman & Germain 2008：51）という。

このように「生活モデル」においてはクライアントとその生活を、生態学における有機体とその環境との関わりになぞらえ説明していくことになる。つまりクライアントとその環境を、実証科学としての自然科学の一領域である生態学にもとづいて捉えていくことになるのである。したがって当然のことながらこのモデルも、先の「治療モデル」と同様に対象化されたクライアント、すなわち存在者の事象領域を「具体的に解明し、そこでの諸事象の知見を増大させる」存在者的な次元の問いかけを遂行する実証科学を指向することになる。それではこの「生活モデル」にもとづいて、先の事例におけるクライアントが抱える問題を把握するのであれば、どのようなようになるであろうか。

「生活モデル」は、「人と環境の交互作用」に焦点を当てていくのであった。つまり「直子さんと環境の交互作用に着目していくことになる」（社会福祉士養成講座編集委員会 2010b：140）のであり、したがって「直子さんとクラスメート、あるいは部活動メンバーとの交互作用、関係性、母親やほかの家族成員との関係性、担任教師や地域社会との関係等、直子さんにかかわるあらゆる環境を想定し、その交互作用とそれへの対処・適応について、種々の問いを立てて情報収集を継続し、包括的・統合的にアセスメント（課題分析）を推進」（前掲：140 - 141）していくことになる。そして具体的に、以下のような「問い」が発せられることになるという（前掲：141）。

1. 直子さんは、学級のなかではどのような様子で、適応状況はどうであったか。クラスメートとの関係はどうであったか。
2. 所属する吹奏楽部では、どのようなストレス状況におかれ、いかに対処していたか。
3. 直子さんと母親との関係はどのようなものであったか。また、ほかの家族成員との関係、あるいは家族力動はどのような状況になっているか。
4. 直子さん家族は、近隣・地域社会とどのような関係を形成しているか。

C. クライアントの実存性に着目する「ストレングスモデル」

最後に、「ストレングスモデル」について考えてみる。このモデルの特徴は、先に検討した「治療モデル」が「クライアントが抱える問題を把握・認識するために、クライアントを問題の原因を有している対象としてとらえる」ことに対する批判から生み出されている。つまり「治療モデル」がクライアントを「対象」として捉えるのに対して、このモデルにおいては「『主体』としてのクライアントを強調することになる」（前掲：135）。そして「支援課題把握の際、クライアントの抱える『問題』を『分類』し、直接的因果関係として特定しようとする治療モデルの方向性に対し、クライアント等の『強さ』を見出し、それを『意味づけ』していくことを重視する」（同前）。そもそもこのモデルにおける「ストレングス（strengths）」とは、「『強さ』や『長所』、『体力』や『忍耐』、『力となるもの』や『支え』などといった意味」（前掲：134）をもっている。したがってそれにおいては、クライアントの「主観性」（前掲：135）もしくは「主体性」が重視されることになるのである。

このモデルにおいては先の事例についても、「直子さんや母親等の『強さ』や『能力』に着目し、光をあてようとするところから、以下のような点が強調されることになる（前掲：140）。なお以下における「SSW」とは、すなわち、スクールソーシャルワーカー（school social worker）の略語である。

1. 直子さんが現在、学校に行っていないことから、自分の意思を表明できる能力をもっている。あるいは、本人にとって最悪の状況を回避できる力をもっている。
2. 母親が担任教師に相談し、紹介されたSSWに会い、話をしていることから、母親には、娘を心配する思いがあり、事態を打開しようとする意思と、対処しようとする力をもっている。
3. 担任教師が母親からの相談を受け止め、SSWを紹介していることから、専門的な役割分担の重要性を理解しており、協働しようとする意思と、事態を解決しようとする力をもっている。

確かにこの「ストレングスモデル」は、クライアントの「主観性」もしくは「主体性」を重視していくことになるのであり、これら3つについても、いわばその実存性（前掲：135）に焦点を当てた解釈がなされているといえる。そしてこの実存性における実存とはすなわち、人間という存在者が「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在する」（茅野1968：91）ことを意味している。たとえば上記の1については、直子さんは学校で友人ができないなどのことから、学校に行かないという自分自身のあり方に自らを関わらせつつ存在している、ということを表している。つまり彼女自身は、そのようなあり方に自らを企投（Entwurf）しているのである。確かにこのようなクライアントの捉え方は、他の2つのモデルにはない「ストレングスモデル」独自の特徴であるといえる。しかしこのモデルにおいても、確かに他の2

つのモデルのようにクライアントを単純に対象化するというのではないもの、やはり存在者として捉えていることに変わりはない。つまりクライアントを、実存という独自の存在の仕方をしてしている存在者として捉えていくことになるのであり、存在者的な次元の問いかけを遂行すると考えられるのである。

このようにソーシャルワーク実践における3つのモデル、すなわち「治療モデル」、「生活モデル」、「ストレングスモデル」の3者は、クライアントを存在者として捉えそしてそれを分析の対象にしている。したがってそれらはあくまで互いに並列の関係にあるということになり、それぞれ互いに理論的に相反する性格を有していながらもジェネラリスト・ソーシャルワークという一つの「入れ物」のなかで共存する、ということになるのである。そしてソーシャルワーカーが、必要に応じてその「入れ物」のなかから1つのモデルを取り出し、それをもとにクライアントが抱えている生活課題を特定していく、ということになる。しかし仮にそれだけのことであるならば、そもそもこのジェネラリスト・ソーシャルワークという援助枠組み自体がこれら3つのモデルの「入れ物」に過ぎないということになり、それについて取り立てて論じるには及ばないということになりはしないであろうか。

先にも述べたようにこの「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」は、これからのわが国における『『地域を基盤としたソーシャルワークや総合的かつ包括的な相談援助』に『理論的基盤を提供するもの』として位置づけられており、かつソーシャルワーク実践における理論的中核を担うものとして期待されつつある』のであった。それゆえそれは、内容のないただの空疎な「入れ物」であってはならないはずであり、あくまでこれら3つのモデル、すなわち「治療モデル」、「生活モデル」、「ストレングスモデル」の混成活用を成立させ得る確固とした理論的基盤をもとに構築されていかなければならないのである。したがって、「それを成立させるメタモデルとは何かといった理論的課題」を解決することが必要になってくることになる。

Ⅲ．存在論的差異－3つのモデルの検討－

ここでは「治療モデル」、「生活モデル」、「ストレングスモデル」という3つのモデルの混成活用を成立させるメタモデルとは何かを明らかにするため、「『もの』そのもの（存在者）と『もの』があること（存在）を明確に区別する」存在論的差異という概念をもとにこれらのモデルの検討をおこなっていく。

まず始めに「治療モデル」についてであるが、これは「客観的証拠（エビデンス）を重視し、客観性や科学性を担保しつつ、課題を認識しようとする特徴をもったモデル、範型であり、その特徴は実証主義に裏づけられている」とされるものであった。そして存在者の事象領域を「具体的に解明し、そこでの諸事象の知見を増大させる」存在者的な次元の問いかけを遂行する実証科学を指向するのであった。つまりソーシャルワーカーにとってこのモデルは、クライエン

トが「結果」として抱えるに至った生活課題の「原因」を、すでに実証的に証明されている一定の法則をもとに特定し、かつその成果をもとに「次の展開を考え、前進すること」を可能にする限り、一定の価値を有すると考えられることになる。つまりこのモデルは、存在者としてのクライアントに対応するものとして、すなわち存在者的な次元の問いかけを遂行するモデルとして、必要不可欠なのである。それでは他の2つのモデル、「生活モデル」と「ストレングスモデル」についてはどうであろうか。

A. 「生活モデル」の検討

先にも述べたように「生活モデル」は、「生物と環境の間のバランスのとれた相互依存関係について追究する学問である生態学の特徴を、『人と環境』との関係において考究したもの」である。つまりそれにおいては、隠喩という表現方法を用いることによって、ソーシャルワーク実践における「人と環境」の関係を生態学における「有機体と環境」のそれになぞらえ捉えていくことになる³。

しかしながら人間は、他の有機体一般とは明らかに異なったあり方をしてるのであり、あくまで自分自身が「ある」ことを問う存在者として捉えられることになる。それはつまり、われわれ自身が実存として存在しているということに他ならないのであり、「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在する」のである。またわれわれはこのように実存として存在していると同時に、「世界＝内＝存在 (In - der - Welt - sein) として「そのつどすでに暴露されている世界において出会われる存在者のもとで存在している」(Heidegger = 2003a : 159) のである。

なるほど人間という存在者、つまり現存在は、確かに環境をもつてはいる。このことは存在者的な次元、すなわち存在者の事象領域を「具体的に解明し、そこでの諸事象の知見を増大させる」次元での問いかけにおいては、ある一定の妥当性をもったものとして理解することが可能である。しかし先にも述べたように人間(現存在)は、他の有機体一般とは異なり、実存として存在しているのであった。それゆえその環境についても、他の有機体のような存在者一般と同様に捉えていくわけにはいかないはずであり、したがってその特有のあり方を明らかにするためには、実存として存在する現存在を存在論的に問う、すなわちその実存としての存在そのものを問う実存論的分析論にもとづいて解明していく必要がある。

Heideggerによれば、そもそも現存在が客体的存在者(もの)に触れることができるのは、現存在という存在者が現に存在しており、かつそれに対してすでに「世界」が暴露されており、さらにこの「世界」のほうから客体的な存在者が接してくる場合だけであるという(前掲：140 - 141)。なおここでいう「世界」とはすなわち、何らかの客体的存在者として規定し得る性格のものではないものの、実際には却ってそれが客体的存在者自体を「はなはだしく規定」(前掲：189)することになる。そもそも現存在としてのわれわれが環境をもつことができるのは、われわれ自身が「世界＝内＝存在」として存在しており、かつその「世界」の内で客体的存

在者と「交渉」（前掲：173）し得るからである。そしてその最も身近な様式は、「配慮的な気遣い」（同前）であると考えられるのであり、さらにそれは以下のように見出され得るものである（前掲：178）。

そのつど道具に合わせて裁断された交渉のうちでのみ、道具は純正におのれの存在においておのれを示すことができるのだが、そうした交渉、たとえば、ハンマーでもって打つことは、この存在者を出来する事物として主題的に捕捉するわけでもなければ、ましてやそれを使用したからといって、道具構造そのものに通暁する知識がえられるわけでもない。ハンマーでもって打つことは、ただたんにハンマーの道具性格に通暁している一つの知識をもっていることではなく、それ以上適切には可能でないようにこの道具を我がものにしたということなのである。そうした使用しつつある交渉においては配慮的気遣いは、そのときどきの道具にとって構成的な手段性に服従している。ハンマーという事物がたんにぼーっと見られているだけであることが少なければ少ないほど、つまり活発に使用されればされるほど、この事物へと態度をとる関係はますます根源的となり、この事物は、この事物がそれである当のものとして、つまり道具として、ますます赤裸々に出会われる。ハンマーでもって打つこと自身が、ハンマーに独特の「手ごろさ」を暴露するのである。

このように現存在がハンマーのような道具的存在者（客体的存在者）と交渉し、かつそれ自体を発見することができるのは、ひとえに「世界が『与えられている』」（前掲：189）からである。われわれはこの「世界」において、配慮的に気遣うことによって、さまざまな道具的存在者（客体的存在者）と出会うことになるのである。それではその一方でハンマーのような道具的存在者ではない、他の現存在（他者）という存在者の場合はどうであろうか。

これまで述べてきたように現存在は、「世界＝内＝存在」として存在しているのであるが、当然のことながら他者も同じくそのように存在している。他者という存在者は先の道具的存在者とは異なり、「世界＝内＝存在」として「共に現にそこに存在しているのである」（前掲：306）。したがって現存在における「世界」は、「そのつどつねに、私が他者たちと共に分かちあっている」（前掲：307）のであり、「共世界」（同前）として規定し得ることになる。門脇俊介はその具体的な例として、以下のものを挙げている（門脇 2008：98 - 99）。なおその内容は、ある会社における女性社員とその同僚の関係性について述べたものである。

お盆を持って男性社員にお茶を持っていこうとしている、女性 W のふるまいをまた考えよう。この W の固有のふるまいのなかには、そのふるまいを成立させるのに欠かせない「他者」が居合わせている。

彼女が使っているお盆という道具は、お盆を作った製作者を指示するだけではなく、どのような者に合わせてその道具が作られているかという、標準的な使用者への（身体的）指示

をも含んでいる。ハエやゴジラには、お盆の標準的使用者になる資格が身体的にそもそも欠けているであろう。また、お盆を用いてなされる「湯呑みを運ぶという仕事」は、彼女と仕事場を共有している男性社員という他者—あるいは一般にお茶を供される他者—なしには、意味を失う。さらに重要なことは、「女性らしく生きる」というWの行為や道具関連を方向づけている「主旨」の理解は、文化Cという局所的コンテクストを生き、かつそのコンテクストの型を保持し続けている文化Cの成員としての自己了解だということである。Wは彼女一人で「女性らしく生きる」という主旨の世界に投じているわけではない。その主旨は文化Cの成員に共有された型であり、成員のそれぞれがその型を保持し続けているのでなければ成立しないが、しかし、成員のそれぞれに対しては（限定された）普遍的な規範として、一定の拘束力を発揮する。

上記においてWは、「女性らしく生きる」という自分自身のあり方に自らを関わせつつ存在しているのであり、いわば「自分の存在することへ向かって自分を関わせつつ存在する」実存として存在している。それと同時に彼女は、その自己のあり方を了解するとともに、他者（他の現存在）とも出会っている。つまり「お盆」を使用するという自体、彼女はそれを製作した他者や、自分と同様にそれを使用する他者と出会っているのであり、またそれを使って「湯呑みを運ぶという仕事」をおこなうことで、彼女と仕事場を共有している男性社員という他者、あるいは一般にお茶を提供される他者と出会うことになる。彼女は「湯呑みを運ぶという仕事」をする、すなわち「女性らしく生きる」という自分自身のあり方に自らを関わせるからこそ、それらの他者が彼女自身にとって存在することになるのである。つまり彼女自身や「お盆」を製作した他者、そしてそれを使用する他者、さらに男性社員はともに「相互共存という存在様式」（Heidegger = 2003a : 322）のうちにあるといえるのであり、他者はともに分かち合っている「共世界」において、互いに「顧慮的な気遣い」（前掲:313）という「交渉」がおこなわれることによって開示されるのである。

先にも述べたように「生活モデル」は、「人と環境の交互作用」に焦点を当てていくことになるのであり、その前提にはクライアントという存在者が環境をもっている、ということがあがる。ただしこのことは、このモデルが依拠している生態学において有機体一般が環境をもっているということとは、そもそも事情が大きく異なっている。人間という存在者（すなわち、現存在）はあくまで実存として存在しているのであり、「自分の存在することへ向かって自分を関わせつつ存在」している。先の例でいうならばハンマーというものは、たとえば自分自身で自宅を修理するというあり方に自らを関寄せたときになって初めて、その人にとって存在することになるのであり⁴、またWが「湯呑みを運ぶという仕事」をする、すなわち「女性らしく生きる」という自分自身のあり方に自らを関わせるからこそ、「お盆」を製作した他者や彼女と同様にそれを使う他者、さらには男性社員という他者が彼女にとって存在することになる。つまり人間における環境は、他の有機体一般におけるそれとは異なり、自らが実存であ

ることにもとづいて形成されるのである。したがって「生活モデル」は、存在者的な次元の問いかけを遂行する自然科学の一分野である生態学をもとにするのではなく、実存としてのクライアントの存在そのものを問う実存論的分析論にもとづき、あくまで存在論的に構築していく必要がある。

B. 「ストレングスモデル」の検討

先にも述べた通り「ストレングスモデル」は、「治療モデル」が「クライアントが抱える問題を把握・認識するために、クライアントを問題の原因を有している対象としてとらえる」ことに対する批判から生み出されている。つまり「治療モデル」がクライアントをたんなる「対象」として捉えることを批判的に捉え、『主体』としてのクライアント」すなわちその実存性を強調するのである。そしてその際には彼らの「ストレングス」、つまり『強さ』や『長所』、『体力』や『忍耐』、『力となるもの』や『支え』を重視することになる。しかしながら確かにこのモデルは、クライアント自身の「主体性」換言するならば「強さ」を強調するものの、やはり彼らを「実存という、独自の存在の仕方をしていいる存在者として捉えて」いることに変わりはない。つまり「治療モデル」に限らずこの「ストレングスモデル」も、ともにクライアントを存在者として対象化しているのであり、その違いはたんに前者において彼らの「弱さ（問題点）」に焦点を当てていくのか、もしくは後者においてその「強さ」に焦点を当てていくのか、という点にあるだけに過ぎないのである。

この「ストレングスモデル」の欠点は、クライアント自身の「主観性」や「主体性」さらには「実存性」を強調するにもかかわらず、ソーシャルワーカーが彼ら自身の「強さ」を規定してしまうところにある。たとえば先の事例においては、ソーシャルワーカーがこのモデルを用いることによって、「直子さんが現在、学校に行っていないことから、自分の意思を表明できる能力をもっている。あるいは、本人にとって最悪の状況を回避できる力をもっている」と彼女自身の「強さ」を規定してしまっているのであるが、クライアント本人はその内容を聞いて果たして納得するであろうか。クライアントすなわち直子さんは、「このままではまずい。学校に行かなければ、みんなから置いていかれる」と焦っているはずであり、かつ登校できない自分の「弱さ」を責めているはずである。そこでソーシャルワーカーが先のように、彼女には「学校に行かないという意思表示ができる力がある」もしくは「最悪の状況を回避できる力がある」ことを指摘することによって彼女自身を力づけるのであるが、しかしながら本人からすれば「学校に行かない」という意思表示の仕方はあくまで窮余の策に過ぎないのであり、それがどのように「学校に行きたい」というより積極的な意思へとつながっていくことになるのか、全く見当がつかないであろう。クライアント本人にとっては、ソーシャルワーカーによる彼女自身の「力」の規定の仕方は、かなり「無理のある関連づけ」としか感じられないはずである。ただし確かにこの「ストレングスモデル」を用いることによって、クライアント本人における「豊かな能力、活力、知恵、信念、確信、望み、成長、可能性、自然治癒力など現在から将来

に至るまでの強さに着目し、それらを引き出し、活用して問題を解決しようとする」(社会福祉士養成講座編集委員会 2010b: 135) ことは、「クライアント中心」というソーシャルワークにおける基本原則に則った実践を展開していくために不可欠なことではある。しかしながらそのためには、ソーシャルワーカーがその「力」を規定するのではなく、あくまでクライアント自身が自らそれを規定していく必要がある。

先の事例においてクライアントである直子さんは、学校に行くことに対しては「弱い自分」だけしか発見することができないものの、しかしその一方で学校に行かないということについては、実際に自分自身の確固たる意思を表明しており、したがってそのことについては自ら「強い自分」を発見していると考えられることになる。つまり彼女自身において、「学校に行かないこと」に関する自分と「学校に行くということ」に対する自分の間には、何らかの差異が生じていると考えられるのである。

クライアントである直子さんは、学校に行くということに対しては「弱い自分」だけしか発見することができていないのであった。それはつまり、彼女が学校に行くという自分自身のあり方に自らを関わらせたとき、そのように感じていることを自ら発見しているということを表しているのである。同じように彼女自身は、学校に行かないことについては「強い自分」を発見していた。ただしこれらのことは、あくまでクライアントという存在者の実存としてのあり方、すなわち存在者としてのあり方について述べているに過ぎない。それではその実存としてのあり方を存在論的に問う、すなわち実存論的に問う場合、どのように解釈することが可能になるであろうか。

これまでも述べてきたように、クライアントはそもそも現存在としてあるものであり、かつ実存として存在している。すなわち「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在する」のであり、またそれと同時に「世界=内=存在」として「そのつど暴露されている世界において出会われる存在者のもとで存在している」のであった。それはつまり、現存在という存在者自身が「開示性」(Heidegger = 2003b: 8) であるということの意味しているものであり、現存在(Dasein)における現(Da)には、「まさしくその開示の遂行の現場の意味が籠められているのであり、いわば、そこで人間のドラマが展開される照明された舞台をも指している」(寺邑 1980: 101)。そしてまさにそこにおいて、「世界-『内存在』の『開示性』の場が切り拓かれ」(前掲: 102) ることになるのである。

「世界=内=存在」における「内=存在」は、「情状性(Befindlichkeit)」、「了解(Verstehen)」,そして「語り(Rede)」という、「等根源的な、つまりその中のどれかが基礎となるということなく同等な三つの契機からなる一体的な構造を持つものとして、解明されてゆくことになる」(前掲: 100)。Heideggerはこれらのうちまず「情状性」についての分析をおこなっているが、これは存在者的には「最も熟知で最も日常的なもの、つまり、気分とか、気分的に規定されていること」(Heidegger = 2003b: 12) であり、これを存在論的に表現するならば、このように(「情状性」と)表されることになる。現存在すなわち人間は、この「情状性」においてつねに自分

自身に直^て面^{して}いる。つまりそれへと「委ねられていたところの、ま^まにそ^の存在者として、つねにすでに気分^に適合して開示されている」（前掲：13）のである。現存在はつねにそれにおいて「おのれを見いだしてしまっている」（前掲：15）のであり、そしてそれは被投性（Geworfenheit）と表現することが可能となる（前掲：14 - 15）。

このように現存在はこの「情状性」のうちに存在しているといえるのだが、それと等根源的にその存在を構成しているのが、すなわち「了解」である。なぜなら現存在は自らを「情状性」において見いだすのであり、そしてそのようなあり方において、ともかくもあり、ないわけにはいかないものとして「了解」するからである。またそれは現存在が自らの存在を、諸可能性に向けて企投する契機となる。この企投とは「ある計画をことさら考えだして、それに合わせて現存在が自分の存在を整えていくというような、計画への身構えとはまったくことなつたもの」（Heidegger = 1994a : 315）であり、「現存在であるからには現存在は、そのつどすでにおのれを企投してしまっており、現存在が存在しているかぎり、企投しつつ存在している」（Heidegger = 2003b : 38）のである。現存在は「自己がそ^こから存在しているところ^ののもろもろの可能性を、なんらかの気分的心境のなかで『見る』」（Heidegger = 1994a : 320）のである。

さらに「語り」も、これら「情状性」および「了解」とともに等根源的である。なぜなら現存在は自らを「情状性」において見いだす、すなわち「了解」するのであり、さらにはそれによって「自己がそ^こから存在しているところ^ののもろもろの可能性」を「見る」ことになるのであるが、この「了解」そのものは現存在が自ら語ることによっておこなわれることになるからである。現存在は「いつもすでに自分を語り現わしている」（前掲：353）のであり、したがってそれは「言語をもつ」（同前）ことになる。

直子さんは学校に行くということに対しては、「弱い自分」だけしか発見することができないのであった。そしてそれは、彼女が学校に行くという自分自身のあり方に自らを関わらせたとき、そのように感じていることを自ら発見しているということを表しているのであった。同じように彼女自身は、学校に行かないことについては「強い自分」を発見していた。つまりいずれにせよ彼女は、自分自身を「弱々しい気分」において、もしくは断固とした「強い気分」において、発見しているのである。これらの気分を存在論的に表現するならば、すなわち「情状性」ということになるのであり、彼女はこの「情状性」においてつねに自分自身に直^て面^{して}いる。つまり、それにおいて「おのれを見いだしてしまっている」のである。そしてそれは、彼女自身における「了解」によって可能となる。なぜなら彼女は自らを「情状性」において見いだすことになるのであるが、それはそのようなあり方において、「ともかくもあり、ないわけにはいかないもの」として「了解」するからである。さらにこの「了解」自体は、彼女自身が自ら語ることによっておこなわれることになる。先にも述べた通りこれら「情状性」、「了解」、そして「語り」の3者は、あくまで等根源的であり一体的に捉えていくべきものなのである。

クライアントである直子さんの「強さ（強度）」もしくは「力」というものは、彼女自身における学校に行かないことについての「強い気分」と学校に行くことに対する「弱々しい気分」

の差異にある。それはつまり「学校に行かないこと」と「学校に行くこと」という、彼女における2つのあり方（可能性）に彼女自身が自らを関わらせたときの「気分」の違い、のことを意味しているのである。

「ストレングスモデル」の欠点は、クライアント自身の「主観性」や「主体性」さらには「実存性」を強調するにもかかわらず、ソーシャルワーカーが彼ら自身の「強さ」を規定してしまうところにあった。しかしながらそもそもその規定自体は、本来ならばクライアント自身がおこなっていかなければならないはずである。クライアントである直子さんが感じている「気分」、それが「学校に行かないこと」における「強い気分」であっても、もしくは「学校に行くこと」に対する「弱々しい気分」であっても、どちらも彼女そのものなのであり、そしてそれらは彼女自身が「了解」することによって初めて明らかとなる。さらにそのことは、あくまで彼女自身の「語り」によって可能となるのである。

ソーシャルワーカーはクライアントと対話をおこなっていくなかで、クライアント自身がこの差異に気づいていくことを待つ必要がある。つまりこの事例においてクライアントは、自分が「学校に行くことができない」ことにある種の無力感を感じてはいるものの、しかし「学校に行かないこと」については断固とした強い意志を表明しているのであり、したがってそれら両者の間には何らかの「気分」の差異が見られることになる。クライアント自身は、ソーシャルワーカーへの語りを通じてその厳然たる事実気づくことになり、自らが「強さ（強度）」もしくは「力」を持ち合わせていることに気づいていく。そしてそれをもとに、さらに自らが変容する可能性について察知していくことになる。もちろんそれは、必ずしも彼女自身が実際に「学校に行くこと」ができるようになる、ということを保証するわけではない。しかし現実にもそのような「強さ（強度）」もしくは「力」を持ち合わせているのだから、登校することを可能にするだけの強い「気分」も持ち得る可能性があるものであり、そしてこのことについて、クライアント自身が自分なりに把握していくことが必要になってくるのである。ただしそれは、あくまでクライアント本人が自らの「語り」を通じて気づいていくべきものであり、ソーシャルワーカーの指示や誘導によっておこなわれるものではない。そしてこれらのことは、実存として存在するクライアントを存在論的にすなわち実存論的に分析したとき、初めて明らかになると考えられるのである。

IV. 3つのモデルの混成活用を成立させるメタモデル

本稿はそもそも、これからのわが国におけるソーシャルワーク実践の基盤を担うべきジェネラリスト・ソーシャルワーク、すなわち「治療モデル」、「生活モデル」、そして「ストレングスモデル」の混成活用をおこなう援助枠組みを成立させるメタモデルについて、考察をおこなっていくものであった。そしてそれは、とりわけそれら3つのモデルが立脚している存在者的な次元、および存在者を存在者としてあらしめる存在について問う存在論的な次元の両者にもと

づいておこなわれることになる。

まず「治療モデル」は「客観的証拠（エビデンス）を重視し、客観性や科学性を担保しつつ、課題を認識しようとする特徴をもったモデル、範型であり、その特徴は実証主義に裏づけられている」とされるものであった。そしてそれは存在者の事象領域を「具体的に解明し、そこでの諸事象の知見を増大させる」存在者的な次元の問いかけを遂行する実証科学を指向するのであった。つまりソーシャルワーカーにとってこのモデルは、クライアントが「結果」として抱えるに至った生活課題の「原因」を、すでに実証的に証明されている一定の法則をもとに特定し、かつその成果をもとに「次の展開を考え、前進すること」を可能にする限り、一定の価値を有すると考えられることになる。つまりこのモデルは、存在者としてのクライアントに対応するものとして、すなわち存在者的な次元の問いかけを遂行するモデルとして必要である。

つぎに「生活モデル」についてであるが、これはそもそも「人と環境の交互作用」に焦点を当てていくのであり、その前提にはクライアントという存在者が環境をもっている、ということがあるのであった。ただしこのことは、このモデルが依拠している生態学において有機体一般が環境をもっているということとは、そもそも事情が大きく異なっていた。人間という存在者（すなわち、現存在）はあくまで実存として存在しているのであり、「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」している。具体的にはハンマーというものは、たとえば自分自身で自宅を修理するというあり方に自らを関わらせたときになって初めて、その人にとって存在することになるのであり、またある会社の女性社員が「湯呑みを運ぶという仕事」をする、すなわち「女性らしく生きる」という自分自身のあり方に自らを関わらせるからこそ、「お盆」を製作した他者や彼女と同様にそれを使う他者、さらには男性社員という他者が、彼女にとって存在することになる。つまり人間における環境は、他の有機体一般におけるそれとは異なり、自らが実存であることにもとづいて形成されるのである。したがって「生活モデル」は、存在者的な次元の問いかけを遂行する自然科学の一分野である生態学をもとにするのではなく、実存として存在する現存在を存在論的に問う、すなわちその実存としての存在そのものを問う実存論的分析論にもとづき、あくまで存在論的に構築していく必要があると考えられるのであった。

さらに「ストレングスモデル」についてであるが、「世界＝内＝存在」として存在するクライアントにおける「内＝存在」を成立させる「情状性」、「了解」、そして「語り」という等根源的な3つの契機をもとに再解釈することによって初めて、このモデルが強調する彼ら自身の「強さ（強度）」や「力」を本来的に明らかにすることが可能になるのであった。つまり先の事例においてクライアントすなわち直子さんは、自分が「学校に行くことができない」ことにある種の無力感を感じてはいるものの、しかし「学校に行かないこと」については断固とした強い意志を表明しており、したがってそれら両者の間には何らかの「気分」の差異が見られると考えられるのであった。そしてクライアント自身は、ソーシャルワーカーへの語りを通じてその厳然たる事実気づくことになり、自らが「強さ（強度）」もしくは「力」を持ち合わせて

いることに気づいていくことになる。さらにそれをもとに彼女自身が、自らが変容する可能性について察知していくことになるのである。もちろんそれは、必ずしも実際に「学校に行くこと」ができるようになる、ということを保証するものではない。しかし現実には、彼女自身がそのような「強さ（強度）」もしくは「力」を持ち合わせているのだから、登校することを可能にするだけの強い「気分」も持ち得る可能性があると考えられることになり、そしてこのことについて、クライアントが自分なりに把握していくことが必要になってくるのである。ただしそれは、あくまでクライアント自身が自らの「語り」を通じて気づいていくべきものであり、ソーシャルワーカーの指示や誘導によっておこなわれるものではない。そしてこれらのことは、実存としてのクライアントの存在を存在論的にすなわち実存論的に分析したとき、初めて明らかになると考えられるのである。

「治療モデル」、生活モデル」、そして「ストレングスモデル」の混成活用を成立させるメタモデルは、存在論的差異という観点、すなわちクライアントという存在者とそれをそれとしてあらしめる存在を区別することによって、初めて明らかになってくる。まず「治療モデル」は、存在者としてのクライアントに焦点を当てたときに適用していくべきものであり、つぎに「生活モデル」と「ストレングスモデル」の2者はクライアントという存在者の存在に焦点を当て、その実存としての存在を存在論的に分析する実存論的分析論をもとに適用していくべきものである、ということになる。つまりこれら3者は、いずれも理論的には決して相反するものではないのであり、クライアントという存在者のどこに焦点を当てていくのかによって、適用していくべきモデルが異なってくるのである。

V. おわりに

今後わが国におけるソーシャルワーク実践は地域を基盤とし、さらに総合的かつ包括的におこなわれていくことになる。その際には必然的に他のさまざまな専門職、たとえば医師や保健師、看護師、ケアマネジャー、理学療法士、作業療法士、臨床心理士、保育士といった医療従事者もしくはケア従事者、さらには弁護士、学校教員などといった他の領域の専門職と協働することが求められる。したがって当然のことながら、他の専門領域の人間にはないソーシャルワーカー独自の専門性が問われてくることになる。ジェネラリスト・ソーシャルワークは、そのようなこれからのソーシャルワーク実践に「理論的基盤を提供するもの」として位置づけられているのであり、したがってその理論的に未整備な部分については事前に十分に解消しておく必要がある。そのためにも、この「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」における3つのモデルの混成活用を「成立させるメタモデルとは何かといった理論的課題」は、ぜひとも解決しておかなければならないのである。

そもそもジェネラリスト・ソーシャルワークは『生活モデル』を中核的实践モデルとし、『治療モデル』『ストレングスモデル』それぞれの強みを撰取」することによって、クライアント

における「複雑多様で、個々別々な動態としての生活をとりえ、課題を認識」することを可能にしていくものはずである。しかし実際には、これら3つのモデルが理論的に相反する性格を有しているながらもそれぞれ並列の関係にある、というだけに過ぎないものとなってしまっている。これまで検討してきたようにこれら3つのモデルは、クライアントという存在者とそれをそれとしてあらしめる存在を区別する存在論的差異という観点をもとに整理したとき、つまり存在者的な次元での問いかけをおこないつつも、それから抜け出し、さらに存在論的な次元での問いかけを遂行したとき、初めてその本来的な関係性のあり方を明らかにすることが可能になるのである。

注

- ¹ 他のソーシャルワーク実践のテキストにおいては、「モデル」と「アプローチ」を同じように捉えている場合もある (久保・副田 2005)。
- ² この存在論的差異という概念そのものは、前期の主著のなかに出てはこないものの、「存在者の存在はそれ自身一つの存在者で『ある』のではない」(Heidegger=2003a:18)という表現は実際に記述されている。なおこの存在論的差異という概念は、論文では『根拠の本質について』(1929)において、講義では『現象学の根本問題』(1927)において、初めて開陳されている (平田 2002:130)。
- ³ 生活モデルはクライアントとその生活を、生態学における有機体一般とその環境との関わりになぞらえ捉えていくことになる。なおその際には「隠喩」という表現方法が適用されることになるが、そもそもこの「隠喩」は、たとえを引いて説明するのに「～のようだ」のような形式をとらずに、「りんごのほお」のように、たとえるものととえられるものを直接結びつけていくものである。したがってクライアントとその生活を、生態学における有機体一般とその環境の関わりに「隠喩」を用いてなぞらえていくとすると、「メタセコイア (街路樹の一種) のクライアント」というような、意味不明の表現が生み出されてしまうことになる。そもそもソーシャルワークという人間を対象とするものに、有機体一般を対象とする自然科学の一分野である生態学の理論体系を適用しようとする自体に、無理があるといえるのである。
- ⁴ またこのハンマーというものは、何らかの事情で自宅を修理することができなくなったとき、たとえば本人が大きな怪我をしてしまったことで修理自体を継続することができなくなった場合、その「道具性」が背景に退き、代わりに「事物性」が際立ってくることになる。ただの物体として「ごろっと」(渡邊 2008:239)、目の前に「処理しにくい厄介な邪魔者として目立ち、露わになってくる」(同前)のである。

引用文献

- Gitterman, A. & Germain, C. (2008) *The life model of social work practice*, Third ed., Columbia Univ. Press.
- Heidegger, M. (1927) *Sein und Zeit*, Max Niemeyer. (=1994a, 細谷貞雄 訳『存在と時間 上』筑摩書房, 1994b, 細谷貞雄 訳『存在と時間 下』筑摩書房; =2003a, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間 I』中央公論新社, 2003b, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間 II』中央公論新社, 2003c, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間 III』中央公論新社.)
- 平田裕之 (2002) 「存在論的差異」木田元 (編) 『ハイデガールの知 88』新書館, pp. 130 - 131.
- 門脇俊介 (2008) 『「存在と時間」の哲学 I』産業図書.

- 茅野良男（1968）『実存主義入門 - 新しい生き方を求めて - 』講談社 .
- 久保紘章・副田あけみ（編著）（2005）『ソーシャルワークの実践モデル - 心理社会的アプローチからナラティブまで - 』川島書店 .
- 社会福祉士養成講座編集委員会（2010a）『相談援助の基盤と専門職（第2版）』中央法規 .
（2010b）『相談援助の理論と方法Ⅱ（第2版）』中央法規 .
- 寺邑昭信（1980）「現存在の予備的な基礎的分析（その2）」渡辺二郎（編）『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣 , pp. 95 - 150.
- 渡辺二郎（1980）「『存在と時間』の基本構想」渡辺二郎（編）『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣 , pp. 1 - 52.
- 渡邊二郎（2008）『ハイデッガーの「第二の主著」『哲学への寄与試論集』研究覚え書き - その言語的表現の基本的理解のために - 』理想社 .

（2010.9.24 受稿, 2010.10.21 受理）

